

令和 3 年 5 月 25 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18H00605

研究課題名（和文）行為者性の概念を拡張する：認知、行動、行為に関する国際的研究拠点の構築

研究課題名（英文）Expanding the Notion of Agency: Building An International Research Network on Cognition, Behavior and Action

研究代表者

宮園 健吾（Miyazono, Kengo）

北海道大学・文学研究院・准教授

研究者番号：20780266

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 8,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、必ずしも信念及び欲求にはよらない中間的な行動を含めた、拡張された意味での行為者性についての研究プロジェクトを立ち上げ、その研究成果を英米のジャーナルや書籍にてアウトプットするものである（プロジェクト1「行為者性と中間的行動」）。加えて、行為者性について多様な観点からアプローチする研究拠点を形成すべく、心の哲学、言語哲学、形而上学等の専門家による研究チームを形成し、それぞれの専門分野の強みを生かして、行為者性の諸相を探求する（プロジェクト2「行為者性と知覚」、3「行為者性と曖昧性」、4「行為者性と時間」）。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、従来型の理想化された行為者についての描像に抗って、より現実的な行為者の描像を提示するものであるが、これは行為者についてのより正確な理論を可能にするという理論的、学術的な意義のみならず、より現実的に捉えられた行為者にとって、どのような環境や制度、社会が望ましいのかという実践的な問題にも深く関わっている。これに関連して、とりわけ、Thaler & Sunsteinによって提示されたNudgeあるいはLibertarian Paternalismのアプローチとの接点についても検討を進め、いくつかの研究発表を経て、現在ジャーナル論文を準備している段階である。

研究成果の概要（英文）：This project aims to investigate the nature of agency in an extended sense, which involves what we call "intermediate behaviors" that are not explained by beliefs and desires (Project1: Agency and Intermediate Behavior). In addition, (2) this project forms a research team of experts on philosophy of mind, philosophy of language, and metaphysics to investigate the nature of agency from a variety of perspectives (Projects2: Agency and Perception, Project3: Agency and Vagueness, and Project4: Agency and Time).

研究分野：哲学

キーワード：行為 信念 知覚 曖昧性 時間 合理性

1. 研究開始当初の背景

Frank Ramsey は信念を“a map by which we steer”と呼び、我々の行動や行為のための地図として極めて重要な役割を信念に与えた。Ramsey の考えを受け継ぐ、信念(及び欲求)によって(意図的)行為や行為者性を説明するモデルは、長年、英米の心の哲学や行為論において主流であり続けてきたし、他方で、このモデルが適用できないような比較的単純な行動についてはあまり多くの研究はなされてこなかった。これに対して、近年、認知心理学、社会心理学、脳神経科学等の研究成果を参照しつつ、必ずしも信念及び欲求にはよらない行動について、より正確には、信念及び欲求によって説明される行為ほど複雑ではないが、他方で、条件反射などの単なる物理的身体運動ほど単純でもない、それらの中間に位置するような行動(以下「中間的な行動」)について徐々に注目が集まっている。

2. 研究の目的

以上のような背景の下、本研究は、(1)必ずしも信念及び欲求にはよらない中間的な行動を含めた、拡張された意味での行為者性についての先進的な研究プロジェクトを立ち上げ、その研究成果を英米のジャーナルや書籍にてアウトプットすることを目的とする(プロジェクト1)。加えて、(2)拡張された意味での行為者性について多様な観点からアプローチする研究拠点を形成すべく、心の哲学、言語哲学、形而上学等の専門家による研究チームを形成し、それぞれの専門分野の強みを生かして、行為者性の諸相を探求する(プロジェクト2~4)。

3. 研究の方法

プロジェクト1「行為者性と中間的な行動」(責任者:宮園):本プロジェクトは、必ずしも信念及び欲求にはよらない中間的な行動に関して、Tamar Gendler の alief 説の利点を受け継ぎつつその難点を克服するような代替案を提示することを目的としている。具体的には、Ruth Millikan によって導入された pushmi-pullyu representations (信念や欲求よりも進化論的に古く、また、人間以外の動物にも広く見られる種類の原始的な表象)によって中間的な行動の多くのケースが説明されることを明らかにする。

プロジェクト2「行為者性と知覚」(責任者:O'Dea):本プロジェクトは知覚の哲学の観点から行為者性を探求する。知覚という現象もまた一種の中間的な行動として、具体的には、知覚的探求行動(perceptual exploratory behavior)、すなわち、知覚能力を用いて周囲の環境についての情報を得る行動として捉えることができる。本プロジェクトは、知覚的探求行動の本性を探求し、その観点から知覚の哲学への含意を探求するものである。

プロジェクト3「行為者性と曖昧性」(責任者:Dietz):本プロジェクトは言語哲学の観点から行為者性を探求する。Bertrand Russell の古典的論文“Vagueness” (1923)以来、曖昧性は、言語や思考において現実を表象することに関する現象として捉えられてきた。これに対して、本プロジェクトでは、曖昧性を、表象に関する現象としてではなく、むしろ、行為者性及び実践的な規範に関する現象として、言い換えれば、意味論的な不確定性(semantic indeterminacy)としてではなく、むしろ、特定の計画や関心を持った行為者による実践的な不決断(practical indecision)として曖昧性を捉えるアプローチを提示し、その言語哲学的な含意を探求する。

プロジェクト4「行為者性と時間」(責任者:Frischhut):本プロジェクトは時間の哲学の観点から行為者性を探求する。基礎的行為(basic action)に関する2つの異なる観点、すなわち、基礎的行為を行うことで別の基礎的でない行為を行うという観点、および、原理的に中断されることがありえない行為としての基礎的行為という観点が、それぞれ、基礎的行為の時間的側面に関する2つの異なる視点に対応するという Roman Altshuler と Michael Sigrist の提案の検討を通じて、基礎的行為の時間性について考察する。

4. 研究成果

(1)プロジェクト1(責任者:宮園)の主要な成果は Delusions and Beliefs: A Philosophical Inquiry (2018, Miyazono, Routledge)、Philosophy of Psychology: An Introduction (2021, Miyazono & Bortolotti, Polity Press)という二冊の書籍、及び、ジャーナル論文、ブック・チャプター、研究発表に結実した。

Millikan に由来する Pushmi-Pullyu Representation によって不合理な行動や無意識的な行動を説明するプロジェクトを進め、共同行為を主題とする論文“Being one of us. Group identification, joint actions, and collective intentionality” (2020, Salice & Miyazono) が Philosophical Psychology 誌より出版され、このアイデアを妄想的信念の説明に応用する論文“Social epistemological conception of delusion” (2020, Miyazono & Salice)が Synthese 誌より出

版された。その他、妄想的信念を主題とする論文"Explaining delusional beliefs: A hybrid model" (2019, Miyazono & McKay)が Cognitive Neuropsychiatry 誌より、想像の鮮やかさ(vividness)についての論文"Vividness as a natural kind" (2020, Miyazono & Tooming)が Synthese 誌より出版され、知覚経験の現象的性質についての論文"Visual experiences without presentational phenomenology" (in press, Miyazono)が Ergo 誌にアクセプトされるなどの成果があった。また、妄想と自己知についての論文"Delusion and Self-Knowledge"、思考挿入についての論文"A hybrid account of thought insertion"を執筆し、共に Oxford University Press から出版予定の論文集に掲載見込みである。

(2) プロジェクト2「行為者性と知覚」(責任者: O'Dea)では、主に、画像知覚、感覚モダリティ、知覚の恒常性の三つのテーマに焦点が当たった。これらのテーマはいずれも、人間が知覚する生物として世界とどのように関わっているのかを理解するという大きな哲学的問題に関わっている。私たちの周りの世界がどのようにして恒常的、安定的に経験されるのか、異なる感覚モダリティ間で知覚どのように異なるのか、どのようにして絵画の中の仮想の3次元の世界が経験されるのか、という問題である。2018年にハンプルクにて発表された論文"The Varieties of Pictorial Experience: Is Picture Perception Confined to Vision?" (O'Dea)では、異なる感覚モダリティにおける絵画の経験について論じた。この論文の目的は、第一に、様々なモダリティの絵画的な経験について検討することで、絵画的な経験の性質を明らかにすることであり、第二に、様々なモダリティが絵画的な経験を具現化できるかどうか、どのような意味で具現化できるかを検討することを通じて、それぞれの感覚モダリティの違いを明らかにすることであった。加えて、異なる感覚モダリティのそれぞれを psychological kinds として理解するという趣旨の論文"What is a Sense Modality?" (O'Dea)を広島にて発表した。知覚的恒常性に関しては、multidimensional scaling という観点から知覚的恒常性を理解するというアプローチを展開することを目指し、具体的には、multidimensional な感覚的空間の研究を通じて知覚的恒常性が説明できる可能性を探求した。この研究は論文"Perceptual constancy and the dimensions of perceptual experience"などに結実した。

(3) プロジェクト3「行為者性と曖昧性」(責任者: Dietz)では、判断と意思決定における合理性の問題に焦点が当てられた。このプロジェクトに関する一つの研究課題は、選好の変化が予測できる場合に前もって決心しておくことの合理性をどのように説明するかという問題を検討するものであった。もうひとつの研究課題は、ambiguity-aversion の証拠とみなされている現象は、実際には、メタ認知的な仕方でも説明可能であり、具体的には、felt-incompetence-aversion として説明されるべきだというアイデアを検討するものであった。これらの研究成果は論文集 Rationality and Vagueness in Language Use and Cognition (2019, Dietz (ed.), Springer)に結実した。

プロジェクト4「行為者性と時間」(責任者: Frischhut)では、人間の経験における時間と時間性の様々な側面に焦点が当てられた。このプロジェクトにおける中心的な研究課題は、第一に、時間が流れるという考えは経験の中で私たちに「与えられた」ものなのか、第二に、この時間の流れという考えは本当に整合的であるのかどうか、第三に、時間的知覚に関する主要な哲学的説明を、特に嗅覚や味覚など、これまであまり探求されてこなかった知覚モダリティにどのように適用するか、というものであった。本課題の研究期間中、これらの問題に関連する様々な段階の草稿を発表してきており、そこでのフィードバックを受けて、近日中に投稿される予定の以下の三つの研究論文に結実する。論文1では、時間の流れの現象的経験が存在するという考え方を批判的に検討する。論文2では、時間に関する moving block 説の観点から、時間の流れの可能性を否定する。論文3では、時間知覚についての考察から、味覚における後味は視覚における残像とは種的に異なっていることを論じる。

(4) ワークショップ等: 2018年2月に Tokyo Workshop on Agency and Cognition を開催し、Tim Bayne (Monash University), Fiona Macpherson (University of Glasgow), Neil Sinhababu (National University of Singapore), Brian McLaughlin (Rutgers University), Nick J.J. Smith (University of Sydney), Kenneth Aizawa (Rutgers University), Catharine Abell (University of Manchester)などのスピーカーを交え、5日間にわたって活発で密度の濃い議論を行った。

2019年12月に Tokyo Workshop on Agency and Rationality を開催し、Ian Philips (Johns Hopkins University), Laurie Paul (Yale University), Lisa Bortolotti (University of Birmingham), Nikolaj Pedersen (Yonsei University), Derek Baker (Lingnan University), Tony Cheng (National Cheng-Chi University), Ryoji Sato (Nagoya University of Foreign Studies), Masatoshi Yoshida (National Institute for Physiological Sciences), Samuel Mortimer (University of Pennsylvania)などのスピーカーを交え、3日間にわたって活発で密度の濃い議論を行った。

最終年度は、新型コロナウイルスの影響で、予定していた国際ワークショップを開催することができず、他の研究活動に予定を変更した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 3件/うちオープンアクセス 4件）

| | |
|---|----------------------------|
| 1. 著者名 Tooming Uku, Miyazono Kengo | 4. 巻 online first |
| 2. 論文標題 Vividness as a natural kind | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 Synthese | 6. 最初と最後の頁 online first |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s11229-020-02920-9 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 Miyazono Kengo, Salice Alessandro | 4. 巻 online first |
| 2. 論文標題 Social epistemological conception of delusion | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 Synthese | 6. 最初と最後の頁 online first |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s11229-020-02863-1 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 該当する |
| 1. 著者名 O' Dea John | 4. 巻 online first |
| 2. 論文標題 Perceptual constancy and the dimensions of perceptual experience | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 Phenomenology and the Cognitive Sciences | 6. 最初と最後の頁 online first |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s11097-020-09705-y | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 宮園健吾 | 4. 巻 134(807) |
| 2. 論文標題 妄想と証拠 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 哲学雑誌 | 6. 最初と最後の頁 90-113 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名 Miyazono Kengo, McKay Ryan | 4. 巻 24 |
| 2. 論文標題 Explaining delusional beliefs: a hybrid model | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 Cognitive Neuropsychiatry | 6. 最初と最後の頁 335 ~ 346 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/13546805.2019.1664443 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 Salice Alessandro, Miyazono Kengo | 4. 巻 33 |
| 2. 論文標題 Being one of us. Group identification, joint actions, and collective intentionality | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 Philosophical Psychology | 6. 最初と最後の頁 42 ~ 63 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/09515089.2019.1682132 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 K. Miyazono | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 Art and Belief | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 The British Journal of Aesthetics | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1093/aesthj/ayy029 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 K. Miyazono | 4. 巻 9(1) |
| 2. 論文標題 Vivid representations and their effects | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 Rivista Internazionale di Filosofia e Psicologia | 6. 最初と最後の頁 73-80 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4453/rifp.2018.0007 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 J. O'Dea | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 Book Review: Sensory Blending: On Synaesthesia and Related Phenomena | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 Notre Dame Philosophical Reviews | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

[学会発表] 計40件 (うち招待講演 27件 / うち国際学会 35件)

| |
|--|
| 1. 発表者名 Kengo Miyazono |
| 2. 発表標題 Epistemic libertarian paternalism |
| 3. 学会等名 Workshop: Striving for Perfection (online) (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Kengo Miyazono |
| 2. 発表標題 Epistemic theodicy and doxastic voluntarism |
| 3. 学会等名 Analytic Philosophy of Religion in Asia (online) (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 John O'Dea |
| 2. 発表標題 New Evidence for Perspectival Perception |
| 3. 学会等名 Japan Association for Philosophy of Science, Autumn Conference (online) |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Richard Dietz |
| 2. 発表標題 Why preferring a vague chance of losing out on a win competently, if there is a non-vague better chance of winning incompetently? |
| 3. 学会等名 Japan Association for Philosophy of Science, Autumn Conference (online) |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Kengo Miyazono |
| 2. 発表標題 Visual experience without presentational phenomenology |
| 3. 学会等名 National Yang Ming University (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Kengo Miyazono |
| 2. 発表標題 Epistemic libertarian paternalism |
| 3. 学会等名 National Chung Cheng University (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Kengo Miyazono |
| 2. 発表標題 Epistemic libertarian paternalism |
| 3. 学会等名 National Taiwan University (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Kengo Miyazono |
| 2. 発表標題 Epistemic libertarian paternalism |
| 3. 学会等名 Analytic Philosophy Workshop at Yonsei University (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Kengo Miyazono |
| 2. 発表標題 Delusion and self-knowledge |
| 3. 学会等名 International Conference on Phenomenology and Philosophy of Mind at Huaqiao University (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Richard Dietz |
| 2. 発表標題 Two Tales of Dynamic Choice |
| 3. 学会等名 Tokyo Workshop on Agency and Cognition (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Richard Dietz |
| 2. 発表標題 Two Tales of Dynamic Choice |
| 3. 学会等名 Hokkaido University (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 John O'Dea |
| 2. 発表標題 Perceptual Constancy and the Sensation/Perception Distinction |
| 3. 学会等名 International Conference on Phenomenology and Philosophy of Mind at Huaqiao University (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Akiko Frischhut |
| 2. 発表標題 The Temporality of Aftertaste |
| 3. 学会等名 Lignan University (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Akiko Frischhut |
| 2. 発表標題 The Web of Change: A New Theory for the Moving Spotlight |
| 3. 学会等名 Ethico-Metaphysica Colloquium (招待講演) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Akiko Frischhut |
| 2. 発表標題 Nothing Quite Like It: A Deflationary Account of Temporal Passage Experience. |
| 3. 学会等名 University of Giessen (招待講演) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Akiko Frischhut |
| 2. 発表標題 Nothing Quite Like It: A Deflationary Account of Temporal Passage Experience. |
| 3. 学会等名 The First International Workshop on Time (招待講演) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Akiko Frischhut |
| 2. 発表標題 Taste After Taste. The Temporality of Aftertaste Experiences |
| 3. 学会等名 First International Workshop on the Philosophy of Sake (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 K. Miyazono |
| 2. 発表標題 Intermediate Agency |
| 3. 学会等名 Tokyo Workshop on Agency and Cognition (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 K. Miyazono |
| 2. 発表標題 Can artificial consciousness be radically different from human consciousness? |
| 3. 学会等名 Artificial Intelligence Beyond Now: Can AI Be Conscious? (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 K. Miyazono |
| 2. 発表標題 Husserlian modal epistemology of consciousness |
| 3. 学会等名 Rationality, Representation, and Reality (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 K. Miyazono & A. Salice |
| 2. 発表標題 Social factors in delusion formation: Causation or construction? |
| 3. 学会等名 International Workshop on Philosophy of Psychiatry (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 K. Miyazono |
| 2. 発表標題 Perception without presentational phenomenology |
| 3. 学会等名 3rd International Conference on Natural Cognition: Experience, Concepts, and Agency [Skype talk] (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 K. Miyazono |
| 2. 発表標題 Intermediate Agency |
| 3. 学会等名 Setouchi Philosophy Forum: Action, Skill, and Know-How (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 K. Miyazono & A. Salice |
| 2. 発表標題 Social factors in delusion formation |
| 3. 学会等名 The 3rd Cork Annual Workshop on Social Agency (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 K. Miyazono |
| 2. 発表標題 The role of imagination in philosophical thought experiments |
| 3. 学会等名 Hamburg-Japan Philosophy Workshop (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 K. Miyazono |
| 2. 発表標題 Aliefs and pushmi-pullyu representations |
| 3. 学会等名 Workshop: Agency & Decision (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 K. Miyazono |
| 2. 発表標題 Does empathy make the world a better place? |
| 3. 学会等名 Helsinki Workshop on Empathy and Emotional Sharing (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 K. Miyazono |
| 2. 発表標題 Imagination and Husserlian eidetic variation |
| 3. 学会等名 Setouchi Philosophy Forum: Bridging Analytic and Phenomenological Approaches (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 K. Miyazono |
| 2. 発表標題 Time and well-being |
| 3. 学会等名 5th Annual Conference of The International Association for the Philosophy of Time (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 R. Dietz |
| 2. 発表標題 Confirmation and aboutness |
| 3. 学会等名 Nanyang Technological University (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 R. Dietz |
| 2. 発表標題 Confirmation and aboutness |
| 3. 学会等名 National University of Singapore (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 R. Dietz |
| 2. 発表標題 Self-talk without self-communication |
| 3. 学会等名 Setouchi Philosophy Forum: Bridging Analytic and Phenomenological Approaches (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 A. Frischhut |
| 2. 発表標題 Physics and Manifest Time |
| 3. 学会等名 FQXI Workshop Time and the Observer (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 A. Frischhut |
| 2. 発表標題 Nothing Quite Like It. A Deflationist Account of Experiencing Temporal Passage |
| 3. 学会等名 5th Annual Conference of The International Association for the Philosophy of Time (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 A. Frischhut |
| 2. 発表標題 Metaphysical Coherentism |
| 3. 学会等名 Ethico-metaphysical colloquium (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 A. Frischhut |
| 2. 発表標題 Temporal Deflationism |
| 3. 学会等名 Past, Present and Future (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 A. Frischhut |
| 2. 発表標題 Nothing Quite Like It. A Deflationist Account of Experiencing Temporal Passage |
| 3. 学会等名 Rationality, Representation, and Reality (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 A. Frischhut & G. Torrenco |
| 2. 発表標題 Time for Aftertaste |
| 3. 学会等名 Framing Recipes: Identity, Relationship, Norms (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 J. O' Dea |
| 2. 発表標題 What is a Sense Modality? |
| 3. 学会等名 Setouchi Philosophy Forum: Bridging Analytic and Phenomenological Approaches (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 J. O' Dea |
| 2. 発表標題 The Varieties of Pictorial Experience: Is Picture Perception Confined to Vision? |
| 3. 学会等名 Hamburg-Japan Philosophy Workshop (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

〔図書〕 計7件

| | |
|----------------|-----------------|
| 1. 著者名 美学会 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 丸善出版 | 5. 総ページ数 768 |
| 3. 書名 美学の事典 | |

| | |
|-------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 宮園 健吾、大谷 弘、乗立 雄輝 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 武蔵野大学出版会 | 5. 総ページ数 396 |
| 3. 書名 因果・動物・所有 ―ノ瀬哲学をめぐる対話 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 Richard Dietz (ed.) | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 Springer | 5. 総ページ数 183 |
| 3. 書名 Vagueness and Rationality in Language Use and Cognition | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 Kengo Miyazono | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 Routledge | 5. 総ページ数 112 |
| 3. 書名 Delusions and Beliefs: A Philosophical Inquiry | |

| | |
|--|----------------------------|
| 1. 著者名 S. Tsugita & K. Miyazono | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 Sage | 5. 総ページ数 2616 (231-234) |
| 3. 書名 The Sage Encyclopedia of Lifespan Human Development (edited by M. H. Bornstein) | |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 A. Frischhut | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 Palgrave Macmillan | 5. 総ページ数 292 (15-31) |
| 3. 書名 The Self and its Realization(s) (edited by A. Altobrando, T. Niikawa, & R. Stone) | |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 J. O'Dea | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 Oxford University Press | 5. 総ページ数 304 (58-76) |
| 3. 書名 Phenomenal Presence (edited by F. Dorsch and F. Macpherson) | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|--|
| <p>Tokyo Workshop on Agency & Rationality 2019 http://kengomiyazono.weebly.com/events/tokyo-workshop-on-agency-rationality-2019 Delusions and Beliefs @ Impferfect Cognitions Blog http://imperfectcognitions.blogspot.com/2019/05/delusions-and-beliefs.html Tokyo Workshop on Agency & Cognition 2019 http://kengomiyazono.weebly.com/events/january-19th-2019 RATIONALITY, REPRESENTATION, AND REALITY http://tf-ap.com/rrr/rrr.php TOKYO FORUM FOR ANALYTIC PHILOSOPHY http://tf-ap.com/ 瀬戸内哲学研究会 https://setouchi-philosophy.weebly.com/</p> |
|--|

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|--|----|
| 研究分担者 | ディーツ リチャード (Dietz Richard) (10625651) | 東京大学・教養学部・特任講師 (12601) | |
| 研究分担者 | オデイ ジョン (O'Dea John) (50534377) | 東京大学・大学院総合文化研究科・准教授 (12601) | |
| 研究分担者 | F R I S C H H U T A k i k o (Frischhut Akiko) (50781853) | 国際教養大学・国際教養学部・助教 (21402) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計54件

| | |
|--|--------------------|
| 国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “Conceptual to the Roots: A Quasi-Kantian Approach to Cognition” Theodore Paradise | 開催年 2020年～2020年 |
| 国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “Epistemic Injustice in Psychiatry” Eisuske Sakakibara | 開催年 2020年～2020年 |
| 国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “‘To Be is to Interbe’: Thich Nhat Hanh on Interdependent Arising” Mirja Holst | 開催年 2020年～2020年 |
| 国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “Three Kinds of Relative Value: Contrasting Well-Being With Its Neighbouring Ideas” Shu Ishida | 開催年 2020年～2020年 |

| | |
|---|--------------------|
| 国際研究集会 Tokyo Workshop on Agency and Rationality | 開催年 2019年～2019年 |
| 国際研究集会 Setouchi Philosophy Forum: Hume on Action | 開催年 2019年～2019年 |
| 国際研究集会 Tokyo Philosophy Reading Group Meeting. Akita International University/Keio University, April 11, 2019 | 開催年 2019年～2019年 |
| 国際研究集会 Tokyo Philosophy Reading Group Meeting. Akita International University/Keio University, May 10, 2019 | 開催年 2019年～2019年 |
| 国際研究集会 First International Workshop on the Philosophy of Sake | 開催年 2020年～2020年 |
| 国際研究集会 The Philosophy of Ghost in the Shell | 開催年 2020年～2020年 |
| 国際研究集会 “Is Color Cognitively Penetrable: How and Why?” Yasmina Yrassaiti, American University of Beirut | 開催年 2019年～2019年 |
| 国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “Veritism and Its Vices” Tamer Nawar, University of Groningen | 開催年 2019年～2019年 |
| 国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “Lewis and Leibniz on Possible Worlds and Possible Individuals: Differences and Similarities Between the Two” Jan Levin Propach, LMU Munich | 開催年 2019年～2019年 |
| 国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “Personal and Objective Ethics: how to Read Crito” Hiroshi Ohtani. Tokyo Women’s Christian University | 開催年 2019年～2019年 |
| 国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “Doing Good by Doing Philosophy” Theodore Paradise | 開催年 2019年～2019年 |
| 国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “Mathematics, Fictionalism, and Sherlock Holmes” Alan Baker, Swarthmore College | 開催年 2019年～2019年 |
| 国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “Testimonial Injustice Beyond Credibility Deficits” Emily McWilliams, Duke Kunshan University | 開催年 2019年～2019年 |
| 国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “Deflationism, Vague Existence, and Metaphysical Vagueness” Rohan Sud, Ryerson University | 開催年 2019年～2019年 |
| 国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “Aesthetic Properties and Philosophy of Perception” Sonia Sedivy, University of Toronto | 開催年 2019年～2019年 |
| 国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “The Origin of Selfhood: A Functionalist Account Based on the Predictive Processing Paradigm” Zong Ning, The University of Tokyo | 開催年 2019年～2019年 |
| 国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “Thought Experiments, Counterfactuals, and Knowledge” Masaki Ichinose, Musashino university & The University of Tokyo | 開催年 2019年～2019年 |
| 国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “Millian Russelianism, Neo- Meinongianism, and Imaginary Names”, Paolo Bonardi, University of Geneva | 開催年 2019年～2019年 |

| | |
|--|--------------------|
| 国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “ Form as Meaning: Towards a Neo-Heideggerian Mereology ” Adrain Kreutz, University of Birmingham | 開催年 2019年～2019年 |
| 国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “ Structural Heteronomy ” Tumomo Tiisala, NYU Abu Dhabi | 開催年 2019年～2019年 |
| 国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “ A Historical Overview of Women and Philosophy in Japan ” Yuko Murakami, Rikkyo University | 開催年 2019年～2019年 |
| 国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “ Moral Stability and Pragmatism ” Ralf Doneison, Louisiana State University | 開催年 2019年～2019年 |
| 国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “ The Normative Primacy of Attitudes ” Andrew T. Forcehimes, Nanyang Technological University, Singapore | 開催年 2019年～2019年 |
| 国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “ What Is It Like To Be a Material Thing? Cavendish ’ s Arguments for Materialism ” Colin Chamberlain, Temple University, Philadelphia | 開催年 2019年～2019年 |
| 国際研究集会 Tokyo Workshop on Agency and Cognition | 開催年 2019年～2019年 |
| 国際研究集会 Setouchi Philosophy Forum: Action, Skill, and Know-How | 開催年 2018年～2018年 |
| 国際研究集会 Setouchi Philosophy Forum: Bridging Analytic and Phenomenological Approaches | 開催年 2018年～2018年 |
| 国際研究集会 Tokyo Workshop on Rationality, Representation, and Reality | 開催年 2018年～2018年 |
| 国際研究集会 “ Ethics in a World of Women ” Tokyo Forum for Analytic Philosophy talk by Clare Mac Cumhaill, Durham University | 開催年 2018年～2018年 |
| 国際研究集会 “ The Language of Reasons ”, Tokyo Forum for Analytic Philosophy talk by Adam Marushak, University of Pittsburgh | 開催年 2018年～2018年 |
| 国際研究集会 “ Doings and Things Done ”, Tokyo Forum for Analytic Philosophy talk by Istvan Zardai, Keio University | 開催年 2018年～2018年 |
| 国際研究集会 “ In the Mood of Reasons ”, Tokyo Forum for Analytic Philosophy talk by Tanya Kostochka, University of Southern California, Los Angeles | 開催年 2018年～2018年 |
| 国際研究集会 “ Two Syllogisms in the Mozi: Chinese Logic and Language ”, Tokyo Forum for Analytic Philosophy talk by Byeong-uk Yi, University of Toronto | 開催年 2018年～2018年 |
| 国際研究集会 “ From Trust to Knowledge ”, Tokyo Forum for Analytic Philosophy talk by Leon Horsten, University of Toronto | 開催年 2018年～2018年 |
| 国際研究集会 "From Trust to Knowledge" Leon Horsten, Bristol University | 開催年 2018年～2018年 |
| 国際研究集会 "Only Knowers Are Happy" Brian Kim, Oklahoma State University | 開催年 2018年～2018年 |

| | |
|---|--------------------|
| 国際研究集会 "Concepts as Event Types" Arvid Bave, Stockholm University | 開催年 2018年～2018年 |
| 国際研究集会 "Introspective Error" Andrew Y. Lee, New York University | 開催年 2018年～2018年 |
| 国際研究集会 "Naming and Possibility" Andre Bazzoni, LOGOS, University of Barcelona | 開催年 2018年～2018年 |
| 国際研究集会 "Epistemic Partiality, Epistemic Injustice, and Virtue Responsibility Epistemology" Rie Iizuka, University of Edinburgh | 開催年 2018年～2018年 |
| 国際研究集会 "Trusting the Predictions of a Hypothesis vs Believing that the Hypothesis is True" Olav Benjamin Vassend, Nanyang Technological University, Singapore | 開催年 2018年～2018年 |
| 国際研究集会 "Rawls's Self-Defeat: How the Utilitarian Dog Bit the Rawlsian Hand that Fed It, A Formal Analysis" Hun Chung, Waseda University | 開催年 2018年～2018年 |
| 国際研究集会 "The Indeterminacy of Unconscious Belief" Raamy Majeed, The University of Auckland | 開催年 2018年～2018年 |
| 国際研究集会 "Plurals and Mereology (joint work with David Nicolas)" Salvatore Florio, University of Birmingham | 開催年 2018年～2018年 |
| 国際研究集会 "What is the Point of Understanding?" Michael Hannon, Institute of Philosophy, London | 開催年 2018年～2018年 |
| 国際研究集会 "A Puzzle About Higher-Order Theories of Consciousness" Jesse Mulder, University of Utrecht | 開催年 2018年～2018年 |
| 国際研究集会 "A Unified Analysis of Attitudes: Bridging the De Re / De Dicto / De Qualitate Divide" Christopher Tancredi, Keio University | 開催年 2018年～2018年 |
| 国際研究集会 "Propositions and Their Constituent Facts: An Essay in Pointillist Metaphysics" Aviv Hoffmann, The Hebrew University of Jerusalem | 開催年 2018年～2018年 |
| 国際研究集会 "What Constraint Should be Imposed on Adequate Criteria of Ontological Commitment?" Masahiro Takatori, Keio University | 開催年 2018年～2018年 |
| 国際研究集会 "Kant, an Unlucky Philosopher of Moral Luck", Tokyo Forum for Analytic Philosophy Talk by Samuel J.M. Kahn, Indiana University-Purdue University | 開催年 2018年～2018年 |

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 | | | |
|---------|--------------------------|------------------------|--|--|
| アイルランド | University College Cork | | | |
| 米国 | University of Georgia | | | |
| 英国 | University of Birmingham | Royal Holloway, London | | |

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 | | | |
|---------|-------------------------|--------------------------|---------------------|--|
| アイルランド | University College Cork | | | |
| 英国 | Royal Holloway, London | University of Birmingham | University of Leeds | |
| ドイツ | University of Hamburg | | | |
| | | | | |